

浄土

monthly
JŌDO

June 2001

6



日本テレコムで、
21世紀も
思いきりしゃべったろ。

市内も、県内も、県外も、国際も。
マイライン選ぶなら、日本テレコム。

OK!

マイラインまるごと、日本テレコム。



電話会社選択サービス

マイライン

平成13年1月10日申込受付開始
平成13年5月1日サービス開始

マイラインの「日本テレコム」への
お申し込み方法

「マイライン」「マイラインプラス」は、市内通話、同一県内の市外通話、県外への通話、国際通話の4つの通話区分で、ご利用になる電話会社を選んで登録する、電話の新しい制度です。月々のご利用料金はかかりません。日本テレコムをお選びになると、0088(国内電話)、0041(国際電話)などの番号を押さなくともご利用になれます。現在、日本テレコムにご加入の方の割引サービス等は継続してご利用いただけます。

日本テレコムにご加入の方へは直接、「マイライン申込書」をお送りいたします。未加入の方は、下記のお客センターまたはホームページへお問い合わせください。

※「マイライン」「マイラインプラス」は、NTT東日本・西日本のサービスであり、日本テレコムはマイライン事業者協議会のメンバーです。

●マイラインのお問い合わせは
お客センターまたはホームページへ

0088-82 (無料) (受付時間) 9:00～21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ

<http://www.japan-telecom.co.jp/>

インターネット(ODN)も、携帯(J-PHONE)も、通信まるごと日本テレコム。

大本山増上寺第八十七世法主

成田有恒台下



洒水される増上寺第八十七世法主（撮影／小堀祐二）

入山式で三解脱門から入られる成田台下（撮影／タカオカ邦彦）



入山式でご垂示される成田台下（撮影／タカオカ邦彦）

平成十三年六月九日、浄土宗大本山増上寺第八十七世法主成田有恒台下の晋山式が行われる。直木賞作家、寺内大吉（ヘンネーム）としても知られ、また浄土宗宗務総長も務められている。



増上寺は光摂殿、事務棟が落慶されたばかり
(撮影／小堀祐二)



光摂殿前で洒水される成田台下 (撮影／小堀祐二)



落慶式には各大本山の法主も参列された。左端は清浄華院法主大田秀三台下、二人目は光明寺法主宮林昭彦台下
(撮影／小堀祐二)

重広の描いた 増上寺

(本文18頁に続く)

重広の
 名所

東都
 名所
 芝増上寺

重広の
 名所



図
 ①



図
 ④

浄土

2001/6月号 目次

カラーグラビア大本山増上寺	写真＝小堀祐二・タカオカ邦彦	1
三縁	成田有恒	6
御晋山に寄せて	大田秀三	8
御法主インタビュー		10
増上寺の版画	榊 ^{さかき} 泰純	18
吉水流詠唱の歩みとその心	池上靈心	26
『人間法然』に学ぶ	山田康弘	36
響流十方	袖山榮輝	40
連載「くすり箱」	市川真人	44
表紙の言葉	宇高良哲	46
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 猊下
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

三縁

法主

大本山増山寺八十七世
成田有恒

晴天六日間、満開の桜のもと大本山増上寺の御忌大会が賑々しくかつ厳肅に営まれました。私は新法主の立場でこの盛儀に臨んだのでありますが、増上寺会館・光棋殿に入るたびに、本来、ここにお坐りになるべきであつた亡き藤堂恭俊法主のことを偲び続けておりました。前法主こそ、この御忌の日を夢見て会館建設に心血を注いでこられたのでした。

しかし、ひたむきな念仏者であつた藤堂御前が、西方浄土へと阿弥陀如来のお導きによつて遷化され、また私自身も増上寺本尊さま

のお導きによつていま此処にあるのではない
か、と自らを励まし励まし、つとめさせて頂
いたのであります。

大本山増上寺と私ということでは、先
の大戦末期、世田谷の自坊から徒歩でこの増
上寺境内へやつてきた若き日のことをいまで
もありありと思ひだします。忘れもしない五
月二十六日の朝であります。交通機関はすべ
て断絶しておりました。すなわち前夜の空襲
で壊滅的な被災に遭い、まさに瓦礫と化した
大殿の前に立ち、声もなく立ちすくんだので
ありました。

爾来五十有余年、さまざまな形で私は増上
寺と広く深く御縁を結ばせて頂きました。

まさに三縁。

この深い御縁を基軸として、三縁山増上寺
を念仏者の結集の場とすることに、私は私の
残り少ない命のすべてを注ぎ込むことを、此
処にお誓ひいたします。

成田有恒上人御晋山に寄せて

盲亀の

浮木に

逢えるが如く



大本山清浄華院法主

大田秀三

増上寺会館光摂殿落慶式で
祝辞を述べる大田秀三台下。

春を迎えた弥生三月十四日早朝に清浄華院に増上寺さんがご挨拶に来られるとの電話があり、そうこうしているうちに成田上人は西島内侍長と共に来られた時のことであります。本山江藤執事長の案内で大殿（御影堂）にあらわれてから、私の部屋に御越しになられました。ご挨拶の後、部屋にお飾りしてある藤堂恭俊台下の扁額を一緒に拝んだのであります。

お念佛

み名をとなえる 数ほどに

気高きみ顔 あらわして

我汝を護り 導くぞと

声かけられる 有難し

勿体無しと み名をとなえる。

清浄華院大田秀三台下 仁誓恭俊

と見事な硯石、ご遺墨の前に成田上人共々語り合つたのであります。

昨冬十一月十六日に東京三田済生会病院に藤堂台下を御見舞に参上しましたが、その十日後に御婦人はるか様から一紙小消息の御著書と共に御贈り下さった朱扇には「白雲悠々」としたためられており、藤堂台下の絶筆だなーと共々に合掌いたしましたのであります。

念佛三昧発得の境地にお入りなられた上人の御遺徳を御偲び申し、私達凡俗の到底おぼつかざるものであると臨終のお姿を想い感涙いたしましたのであります。

その日は成田上人が知恩院での大僧上叙任認証を受けられる日で、それを前にしてのご挨拶に重々恐縮のいたりのひと時でありました。私自身、先年同時期の清浄華院入山以来、涼徳不戈を嘆き自分自身の「阿留^{ある}辺^へ幾^き夜^や宇^う和^わ」梅尾高山寺明恵上人の七字に悶々たるの身であります。「無明に盲ぜられて本覚の路に迷い、妄想の霧厚く閉ざして出離の計ごとを忘る」今日此の頃でありました。新世紀を迎えたこの時機に「いさみある念佛聖」成田上人の増上寺御晋董の慶事は老納にとりましては勿論、浄土一宗にとりましては一大慶事と云わなければなりません。

省みますと戦時中大正大学宗教学科の同窓生であり、爾来奇しき因縁のきづなは断ち難く、常に不甲斐なき私を扶けての成田上人であります。まさに、盲亀の浮木に逢えるが如く、闇夜に燈火を得たるが如しとの論のとおりであり、力強く励ましの存在であつて載きた度いと念願してやみません。「事の外に立ちて、事の内に屈せず」との古諺があります。がどうぞ一層のご自愛專一にご研鑽をつまれ、「願共諸衆生往生安樂国」と共生極樂往生浄土の道を歩み続けて参りましょう。

インタビュー

大本山増上寺八十七世
成田有恒法主に聞く

念仏と ともに 生きる



——いまのご心境をお伺いしたいのですが。

慣れないことで、いまは何かも勉強ということですね。大本山と申ししましても、寺院の拡大されたものですから、仕事という意味ではそう違いがあるわけではありません。伝法といった面の差でしょうか。増上寺はいま会館が出来上がったばかりで新しく、とても活気があります。春のお彼岸の中日、法要を勤めましたが、千人を越すほどの盛況で大殿はいっぱいになりました。

——新しい墓地もできましたね。

申込みが随分あるようですね。この間、雑誌「法然」の対談で女優の藤村志保さんとお会いしましたね。新しい墓地に参りまして、そのとき藤村さんも申し込まれたようでした。

——増上寺は昔から東京の真ん中にある本山ですね。

大門からJR浜松町の駅の間は最近十年の企業進出でサラリーマンが最も増えた場所といえます。実に様変わりしてきました。昼間の人口は東京でも最大の部類に入るのではないのでしょうか。増上寺



の境内にも昼間、大勢の人がくつろいでいます。こうしたサラリーマンの人々をどう引き入れるか、こうしたことも教化の大きな課題のひとつといえますね。

——東京生まれ東京育ちの御法主ということになるのですが。

古くは記録的によくはわかりませんが、福田行誠御法主以来ということになるのでしょうか。相当な昔ですね。ま、東京の寺院に生まれ育った者として増上寺にはもちろん子供頃からいろいろな形で親しんできましたね。空襲で壊滅的な罹災を受けたとき、交通機関はすべて断絶したなかを翌朝、世田谷から徒歩で来ましてね。強い衝撃を受けました。

——当時、本誌「浄土」の編集をなさっていたのですね。

学生時代からアルバイトのような形で「浄土」の仕事を手伝っていました。三門の向かいにあった宗務所には毎日のように来ていたのです。当時「浄土」に、いまのご門主のお父さんの中村辨康執事長の連載がありましたね。毎月原稿をいただきに増上寺に行くわけです。「浄土」は昭和10年から続く伝統の雑誌として、いまでも貴

重な存在だと思っています。創刊当時は仏教ルネッサンスという言葉が生まれたものです。執筆陣も綺羅、星の如くでしたね。

――編集に携わっておられた頃は昭和19年、まさに戦中という時代のまっただなかですね。

そうです。この間「文藝春秋」の随想にも書きましたが、ある朝当時の大島徹水法主が徳川家の墓塔の並ぶ一角に、ひとり立っておられた。ひとり立って地面を見つめておられるんです。なにしろ大入道でしたからね。学生の私にも一目でわかるんです。何をしてるんだろうと思ひましてね、近づいて挨拶すると「これを見ろ」とおっしゃって。すると首が転がっているんです。生首ではないですよ。錆をふいた青銅製の首です。それは銅像搬出の際に、台座から外された板垣退助なんです。外しただけでなく、ご丁寧に首も切り落として、投げ捨ててあったんです。わざと首が切りとられ転がっているんです。法主にうながされましてね、私の発声でご一緒に「我建超世願」とね、四誓偈を読んだ記憶があります。なにも「自由は死せず」の板垣さんに理屈っぽく共鳴したということではなく、銅像にせよ首を引き千切るとは何事だ、と大島大僧正は思われたんですよ。



——戦後、作家を志すことになりますね。直木賞をおとりになった頃のお話を。

「近代説話」という同人誌を創りました。そこから沢山の作家が文壇に飛び出しました。私は直木賞をもらいましたが、いわゆるエンタテイメントの列に加わることなく、終生を僧院の内にとどまって暮らすことになった。しかし若き日に宗門会議の風景を書いたりしたことが何かになっている。宗務総長になったり、そしていま大本山の法主に就任したり、ということがね。若き日の「血腫」のようなものが残っている、とでもいうのでしょうか。

——司馬遼太郎さんも「近代説話」の同人でしたね。

彼だけが、なかなか賞をとれなかった（笑）。そういえば、法主就任の認証式のために京都に向かう車中で司馬遼太郎の短篇集を拾い読みしたのですよ。懐かしい思い出が一気によみがえってきました。特に思ったのが「戈壁の匈奴」という作品です。出来栄えの完璧さは発表当時から感嘆していたのですが、これは実に短時間で出来上がった作品なのです。この作品の成立には彼と私だけが知る話

があるのです。「近代説話」の創刊にあたって司馬の作品だけが遅延していた。そこへやっと書き上げたという電話が入った。是非、生原稿で読んでほしいというので私は大阪に飛んだのです。ミナミの宿で六十枚ほどを精読したわけです。ところが、これが私小説なんですよ。どろどろした内容でね。作家として蟻地獄に陥っているように思えた。それで率直にそれを告げたんですね。この路線は捨てたほうがいい、と。彼は抵抗しました。しかし私も譲らない。曉方まで論戦しました。そしてようやく納得してもらった。

——あの司馬遼太郎さんに私小説のような作品があるとは驚きです。それで別のものを書いたのですか。

そうです。創刊号の発表が遅れるで、と彼が云うので、私は同人誌なんだからべ切なんかどうにでもなる、と云った。それから十日後の深夜です。「ジンギスカンを書いたで」と連絡してきた。それなら大丈夫と私は思った。信頼しました。よく熱をこめて話をしていましたから。しかし印刷から上がってきた初校のゲラを読んだときは心底から驚嘆しました。想像を超えていた。歴史をロマンで凝縮したとでもいふべき素晴らしい作品になっていたのです。



——歴史作家、司馬遼太郎の誕生秘話です。

そうかもしれません。歴史上の人物に瑞々しい血を通わせることによって壮大なロマンを描く、という彼本来の小説は、このときの作品がヒントになっているのかもしれませんが。若き日の「血腫」という意味ですね。そういえば、彼に誘われて土佐を何日も旅行したことがあった。ついてきてくれ、というのです。そして何を見ても何処へ行っても「あれは何だ、これは何だ」と質問責めをするので私もまたいい加減に答えていたのですが、それからしばらくして「竜馬がゆく」が発表されたり（笑）、とかそんなことがありました。

——台下はいまも寺内大吉という一人の作家でもあられるのですが、これからは、ご自身のなかでどんな風に折り合いをおつけになつていかれるのですか。

兼務（笑）ということですかね。ま、それは冗談ですが、矛盾はありません。人間はさまざまなものの折り合いをつけて生きています。たとえば「死」というものとも。椎尾大僧正がおっしゃっていた「共生」ということ。私はあの「共生」という思想を「生きとし生けるもの」だけとの共生とっていいのです。私はかつて長

男を若くして病に失いましたが、彼は私のなかにいま生きています。先立たれたときは強い衝撃がありました。その後、残った娘たちにお経をあげる習慣ができましたね。そのとき、ふと思った。この小さな娘たちが懸命にお経を唱えている。これは死んだ息子の化導なのではないか、とね。化導という言葉を実感したのです。死者とは私たちと共に生きる、そういう存在なのです。

——御法主台下であられるということはそれだけで大変な激務であろうと思いますが、とてもご健康そうにお見受け致します。何か秘訣はあるのですか。

これといって健康法はありませんが何かひとつでいいから趣味をもつことが大事だと思います。私の場合でいえば、小さい頃からさまざまな記録を集めスクラップすることが好きです。野球のスコアブックとかそういうものです。お茶と梅干しを傍らに置いて整理したりチェックしたりしています。それから、お念仏ですね。列車や自転車での移動などの際に、お念仏を称える。そういう風に行っているだけで若い頃はとても無理だと思われた数、一日に数万回のお念仏をお称えできるのです。健康法といえ、これかもしれませんね。

(文責・本誌佐山哲郎)





図②

増上寺の 版画

桼 泰純

(大正大学教授)



図③

東京都港区芝公園の大本山増上寺の描かれた版画を、初代歌川広重（一七九七～一八五八）の作品を中心に紹介しようと思う。ご存知の通り、増上寺は徳川家の菩提寺でもあったので、江戸時代は、版画に描くのに制約があった。御霊屋などは登場しない。一番描かれたのは三門である。図①（カラーページ）は3代文政頃（一八一五～三〇）の「芝増上寺」と題された作品。三門の前を北側の御成門の方を見た図で、朱の三門と緑の松林とが対比され、色合いでまず目につく。図②はその御成門内の「増上寺山内図」と題された同時期の作。現在の港図書館の前あたり。増上寺へお参りに来て、この近所で駕籠に乗ったのであろうか。見送りにでも来た僧と挨拶をしている。当時の風習を示しているように思われる図である。図③は三門の上に人が上がっている。五月十六日に「今日東叡山文殊楼、増上寺山門、浅草寺山門を開て諸人楼上に登る事をゆるす」と『東都歳時記』に記されている「山門びらき」の日であろう「芝増上寺之図」と題された作品。左手に登楼し



図⑤

ている人物を描いた三門、左手奥に御成門を
 図したもの。空の真中には「たゞ横の街見お
 るす霞かな」という池北庵梅笑の句が刻られ
 た天保十四年（一八四三）の作。図④（カラ
 ーページ）は三門楼上より東側の芝神明社か
 ら芝浦の方を眺めた図。「従山門上市中眺望
 之図」と割注されている「芝増上寺」と題さ
 れた安政元年（一八五四）閏七月の作。婦人
 や子供たちの着物の柄もよくわかり、海が近
 かったことが知られる。これを反対側から描
 いたのが図⑤の「芝浦自海上増上寺遠望の図」
 と題された作品で、帆船の浮かぶ海上から緑
 の木々の中に三門と大殿の屋根を描き、五重
 塔も遠望される。これは弘化二年（一八四五）
 に開版された小版の作。図⑥は増上寺の南、
 古川の方から眺めた「芝増上寺前の図」と題
 された弘化四年（一八四七）から嘉永五年
 （一八五二）の間に開版された作品。右手前
 の橋は金杉橋であろうか、少しおぼつかない
 が、雲の上半分に桜の中の増上寺を描いてい
 るのは、聖なる別世界であることを示してい
 る。この図⑥より古川を逆上がった赤羽橋よ



図⑥



図⑦

り増上寺の五重塔を描いたのが図⑦の大短冊の「芝赤羽根増上寺」と題された作品。橋のたもとの茶屋の前を町駕籠が二つ、橋上には馬上の武士、人々の往来する川向うに朱の五重塔、緑の木々の間に桜の花、明け方であろわか、少し赤味を帯びた空に青味を帯びた手前の道が対比されている。

明治時代の版画をご紹介します。少し汚れの目立つものであるが、図⑧は「東都名所芝増上寺」と題された小版の作品。注意していただきたいのは、大門と三門との間に鳥居が建っている。これは「大教院」といっていた時期に鳥居のあったことは記録にあるが、ど

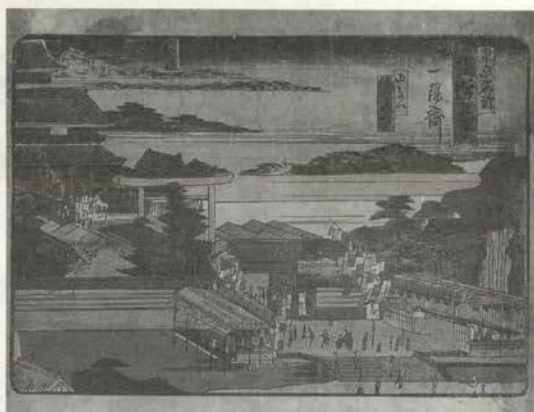


図
8



図
9

こに建っていたか不明であったが、この歌川豊宣の絵によって、その場所を確認できる。明治初年の大教院時代の増上寺を知る貴重な作品なので、ご紹介しておこう。図9は明治二十三年（一八九〇）の「東京名所芝公園増上寺真景」と題される三枚続の小林幾英の作品。中央にこの三門を置き、右に大殿と御霊屋を描いている。しかし真景とはいいながら「徳川家廟」とあるだけの略図。左には「諸品陳列」の「勸工場」があり、文明開化の時代を示している。門前には大勢の人物がおり、人力車を通り、和服の中に洋装の婦人、帽子にステッキの洋服の男、和服にコウモリ傘をさした人など、当時の風俗がわかっておもしろい。

昭和の作品であるが、御霊屋を描いた作品があるのでご紹介しよう。織田一磨の「芝おたまや」と題された昭和五年（一九三〇）の作品（図10）。昭和二十年の戦災で焼失してしまった御霊屋の姿を残してくれたのはありがたいが、何代様のものか特定できないのは残念である。



図⑩



図⑪

増上寺の三門を描いたもののうち、建築学的にも正確な作品が、図⑪の川瀬巴水の「芝増上寺」である。大正十四年（一九二五）の作であるが、手前雪の積もった松、向こうに朱塗りの三門、その間に蛇の目傘をさし黒の着物の女性が吹雪に立ち向かって歩いている。緑と赤と白との鮮やかな色の対比の中に、一種の叙情を感じさせる。芝大門で生まれた巴水ならではの、増上寺をよく知り尽くした作品といえよう。

浄土BOOKフォーラム

二十一世紀のこころを癒す

武田仁 『合掌の世界』



日貿出版社刊
定価2100円(税込)
問合せ・注文
法然上人鑽迎会
03-3578-6947

0・6mmの線画で仏画を描く武田仁氏がいま各界から注目を浴びている。
無駄を省いた線で描かれた阿弥陀仏をはじめ、観音菩薩、不動明王などの仏像は、
見る者の心からも余分なものを取り除いてくれる。

1981年の最初の仏頭画展から二十年の月日が経ち、
ますます円熟の境地に入った武田氏の仏画が一冊にまとめられた。
武田仁氏のホームページアドレスは、

www.futuren.com/jintak/jintak.html。



法然上人鑽仰会
講演会のお知らせ

上人様の 後ろ姿を 仰ぐ

講師 **井上洋治先生** (カトリック神父)

日 時 平成13年 6 月26日 (火曜日)

午後三時より四時半まで

場 所 浄土宗増上寺慈雲閣

東京都港区芝公園4-7-4 03-3432-1431

都営三田線／御成門駅下車徒歩 5 分

都営浅草線、大江戸線／大門駅下車徒歩 7 分

JR線／浜松町駅下車徒歩10分

会 費 無料 (予約不要)

講師略歴／いのうえ・ようじ

1927年生まれ、東京大学文学部卒業。フランスの修道院に入会、帰国後カトリック司祭になられ、1986年より「風の家」を主宰されている。法然上人に深い関心を寄せられている神父さんである。著書に『日本とイエスの顔』、『まことの自分を生きる』他。

吉水流詠唱の

歩みと

その心



詠唱教導司

池上靈心

シリーズ 詠唱

吉水講誕生より 今日までの歩み

「浄土」四月号に松濤先生が、仏教の伝承とともに日本の国で芽生えた詠唱についてお書き下さり、その歩みを教えて頂きました。

私はその後の吉水流詠唱の歩みと、吉水講の誕生、そして「詠唱の心」についてお話ししたいと思います。私個人の体験です。個人的なことになることをお許し下さい。

私と詠唱との出会いは昭和二十一年であります。終戦直後、日本の国も人の心も荒廃しきっておりました。祖国再建という希望のもとに、八年間の軍隊生活を終えニューギニア島から六月に生還しました。胸に抱いて帰った「桐の小箱」に礼をする人は一人もありません。失望と落胆、私の心も荒廃しました。師僧は私の心を読み取って、「知恩院へ参ってこい」と言われました。着るものも履くものもなく、軍帽軍服と長靴で知恩院にお参りし、

大殿前で拝礼して更に、百六十五の石段を駆け登って、祖師の御廟の前で木魚をたたき一所懸命念仏しました。もって行きどころのない心が少し落ち着いて、僧侶としての心が蘇ってきました。

帰るとき知恩院表玄関の前で、大きな看板が目に入りました。「第一回 詠唱講習会 浄土宗」と書かれてあります。私は胸が熱くなり心はずんで、元祖様のお導きと思い、そのまま講習会に参加しました。

当時の浄土宗教学部長吉水智承師が、荒んだ人の心に落ち着きと安らぎを与えるために計画された詠唱の研修会でありました。その時の講師が現在知恩院吉水講顧問の松濤基道先生と故鈴木錦承先生でありました。受講者の中に兵庫教区教区長、花木順導師がおられたようです。この時はまだ面識もなく記憶に残っていませんが、このことが兵庫教区における詠唱の源泉となることになるのです。私がまだ三十一歳のときでありました。



その年の九月に花本教区長は、兵庫教区普通講習会に「詠唱」を取り入れられました。「法」は「人」によって広まると申します。花本教区長がおられなかったら、「浄土宗第一回 詠唱講習会」の芽は兵庫教区に育たなかったと思います。その時の講師が曾我晃也先生でありました。その受講後、私は曾我先生に師事しました。知恩院に來られたときは必ずお知らせ頂き、華頂会館に泊まり込んで教えて頂きました。先生は嫌な顔もせず、熱心にご指導して下さいました。私はトントン拍子で進級して四級教導師の資格を頂き、福井教区に講師として出向も命ぜられまし

た。

昭和二十二年不思議な縁で観音寺へ御法縁を頂きました。私は三歳のとき父と死別しましたので、父の父が恋しく、養子縁組のお話のあったお寺の中で、一番若い父母のところを選んだのが観音寺でありました。観音寺は花本教区長の寺の近くで、「武崎組詠唱研修会」が花本師を中心に行われており、曾和探玄師、知足円明師などの詠唱のお仲間にも入れて頂くことができ、活躍の場が与えられたことになりました。亡き父の導きとありがたく思っております。

当時詠唱に励むものは高齢者ばかりでありましたので、楽譜が読めない者が多く、指導教本の作成に、先生方はそれぞれ苦労されました。私は楽譜を絵に表すことを考えつき、ずいぶん苦労して教本として「図表」を作ることができました。今日ではそれが取り入れられて、『吉水流詠歌集図表用』として正式に採用されております。

昭和二十二年十二月、浄土宗に大きな政治の変動がありました。せっかく指導して頂いていた先生方と連絡が絶えてしまいました。しかしそのことが「災い転じて福」となり、「武崎組詠唱研修会」の先生方の団結を一層強くしました。自坊の教化はもちろん、有縁の寺を求めて詠唱指導に精進し、同志を増やしました。知恩院御忌法要中、日中法要とお建夜法要の間の二十分間を頂いて、団体の名もなきまま元祖大師前に座り、最初に教えられた「春の御詠歌」「黒谷和讃」「秋の御詠歌」を、感激と共に奉納しました。年々同志を増やし、昭和二十五年には百五十名余りの人数で法要を盛り上げました。このことが現在の知恩院の御忌奉納の起源であります。

昭和二十六年九月本派浄土宗において、宗規第二十三号により、詠唱司規定が施行され知恩院吉水講が産声をあげたのであります。「詠唱」というのは浄土宗が決めた言葉で、詠歌と和讃及び舞を吉水流詠唱といいます。

詠唱を正しく受け取るために「検定」という制度が設けられ、合格した者を以て作った組織を「吉水講」といい、お寺を中心に檀家の詠唱教化をしますので、お寺を〇〇支部としました。組織ができ、講員も年々増えて、規則に従って進級をしますが、新曲・新舞ができないことが指導者にとっては一番つらいことでした。考えた末、法然上人二十五霊場の御詠歌を、「春の御詠歌」「秋の御詠歌」の曲で応用詠唱することにして、進級科目の補いの道を開きました。言葉を簡単にするため「春の御詠歌」の曲を「円光調」、「秋の御詠歌」の曲を「明照調」と名づけたのはそのためであります。

その窮状を救って下さったのが、松濤先生のお話に出ておりました知恩院法務部長板倉貫瑞師であります。詠唱に理解があり、先生のご自坊に連れて行って頂き、レコードラックの中から捜し出したのが、本願調と信濃調であります。板倉先生は八百谷先生と親交が



あり、本願調をレコードに吹き込んでおられたのを知っていたと思います。飛び上がるほど嬉しく思いました。早速楽譜に直して「弥陀本願の御詠歌 きよみづり御詠歌」という題で新曲発表しました。更に有縁の三宅勝先生とめぐり合い、「光明撰取の和讃 花のうてな御詠歌」の作曲をお願いし、これも新曲発表することができました。こうして検定科目選択の面でも一息入れることができたのです。

次は新舞であります。大変な苦勞をして曾和探玄先生のお導きで、京都井上流の家元井上八千代先生に近づくことができ、「弥陀本願の御詠歌」の日本舞の振りつけをお願いすることができました。先生の作品は合舞で大変難しいのですが、一所懸命勉強して何とか吉水流とすることができました。井上八千代先生の特別のお計らいであることはいうまでもありません。詠唱に励む者は、お唱えが上手にできるとかできないとかは第二の問題で

あり、とにかく新しい曲を求めているのであります。新曲を発表することが、一番大きな励みとなり、詠唱発展の道となることを知らねばなりません。

続いてご縁が開けて藤間流の藤間良輔先生にお願ひして「きよみずの御詠歌 花のうてな」の御詠歌の新舞ができました。更に山村流の山村龍正先生による「かりそめの御詠歌 柴の戸の御詠歌」の振りつけをお願いし、日本舞を取り入れることができました。先輩先生方の吉水流洋舞の中に日本舞を取り入れることは申し訳なく思いましたが、事情やむをえないことで、吉水流詠唱の生命を保つための日本舞の採用でありました。

昭和三十六年法然上人七百五十年大遠忌を機に、浄土宗分裂の悲しみは暗れて、合同の喜びとなりました。

吉水流詠唱は、分裂合同という政治の荒波に沈むことなく荒波を乗り越えて、教化の立場において力を合わせて前進してきました。

松濤先生が知恩院吉水講五十周年であると共に、浄土宗詠唱設立五十五周年であると言われたゆえんであり、あらためて大先達吉水智承先生の教化に対する叡智と英断に、敬意を表すべきと思います。

吉水流詠唱のこころ

「本宗の宗儀に則り、称名正行の助業として、本宗の制定した詠歌、和讃、及び舞を吉水流という」

これは浄土宗の規則にある言葉です。宗儀とか、称名正行とか、助業とか難しい言葉がありますが、吉水講の講員はこのまま覚えて頂きたいと思います。

わかりやすく申しますと、阿弥陀様に生命を捧げ、本願を信じて、お念仏をお唱えして浄土に生まれることが浄土宗の教えであります。年中行事の法要でお説教を聞かれた方、五重相伝をお受けになった方は、再三再四聞いておられる言葉であります。

お唱えする御詠歌はほとんど法然上人のお歌であります。法然上人が熱烈な信仰のお心を、三十一文字にまとめて残されたお歌であります。松濤先生は法然上人のお歌の心を表現するために、苦心して作曲されておられます。私たちはそのお歌をお唱えすることにより、おのずから法然上人のお心に近づき、お念仏を喜ぶことができるのであります。和讃は古歌もありますが、ほとんどが年中行事の法要に併せて作詞して頂いております。したがって年中行事の法要を通じ、おのずから念仏のお心に触れることができるのであります。詠唱が念仏の助業といわれる意味であります。

助業ということは、念仏を唱えるための導きということで、目的は詠唱を通じて念仏を唱えることあります。五重相伝ではその勧誠に念仏を唱える方法として、五通りを教えて頂きました。

一、仏と差し向かいになりお経を読む。

- 二、仏と差し向かいになり仏の顔を覚える。
- 三、仏と差し向かいしつかり仏を拝む。
- 四、仏と差し向かい仏のみ名を唱える。
- 五、仏と差し向かい徳を讀^よえご供養をする。

正行を五種と設けども他はみな

第四の稱名^{なづな}を助けんがため

仏と差し向かいになり、詠唱をお唱えすればおのずから四種の方法が実行され、お念仏が口からこぼれ出るように導かれるのであります。

八百年の長い歴史の中で、念仏の教えを受け継ぎ、そして伝えられた祖師方の「伝弘の力と徳」により、代々のお寺の住職を通じて檀家の方々に念仏の教えが弘められ魂の安住が与えられてきました。そうした念仏信仰の地盤の上にたつて詠唱がひろがってきたのであります。

お寺にお参りして仏と差し向かいで詠唱を唱えれば、おのずから念仏の声となつて救わ

れるのであります。私たちの行為の全ては、心に思うこと、口に言うこと、身に行うことで「身口意の三業」と教えられております。心に思うことはおのずから声となり、動作となつて移つてゆきます。声には「身口意」を統率する不思議な力があります。

怠けがちな身も心も、声によつて励まされます。法然上人が本願念仏は声に出してみ名を呼ぶことであるといわれた意味がここにあります。お唱えするご詠歌はほとんど法然上人のお歌です。拝む心で声に出せば、お念仏の心を正しく受け取ることができるのです。

以前録音するとき、本職の歌手にお願いしたことがあります。一応引き受けて頂きましたが、録音の当日「私は歌うことはできるが、唱えることはできません」と断られ困つたことがあります。しかしよく考えますとこの言葉は、とてもすばらしい言葉だと思ひます。詠唱は歌うのではなく「唱え奉る」のであります。楽譜通りに唱えることも大事

なことですが、仏と差し向かいに唱え奉るつまり拝む心が大切であり、念仏の助業の意味がここにあります。お舞いも同じです。上手に踊るのではなく、すなわち拝む心で舞うことが吉水流の舞の基本であります。

次に詠唱は、仏と差し向かいにお唱えするのですから、おのずからお寺の法要がお唱えの場となります。詠唱は法要の意義を明らかにし、法要を盛り上げ、法要の目的を達成する大きな役目があります。したがって詠唱のための奉納ではなく、法要のための詠唱であります。指導する人は法要の意義をよく理解し、住職と事前の打ち合わせをし、法要の差定（プログラム）の中にどこにいられて奉納するかを決めなければなりません。「入堂和讃」をお唱えするときは、ご寺院の本堂の広さを確認し、法要の流れを止めないように奉納を始めなければなりません。法要の中の「献灯和讃」は、特に事前の訓練が必要であります。本堂の広さ、出発の位置、リズムに合わせた

足の運び、方向転換の仕方、動作の訓練、器具の持ち方、供える場所の明示など、事前に現場における訓練が必要であります。献灯献華は両側より、献香はみ仏に向かい右側より入り左側に下がることを原則とします。

先に申しました如く、法要のための詠唱です。ですから法要に關係する種目、お彼岸法要には「ひがんと讃」を主とし、奉納種目は一、二に止めることが大事であります。種目が多いと法要が乱れます。詠唱を入れた法要差定（プログラム）をプリントして、講員全員が承知し、御寺院及び一般参詣者には奉納種目の歌詞だけでも印刷し配布しておきますと、詠唱に関心を持って頂くとともに、法要を盛り上げる事ができ、詠唱普及のよき縁となります。

法要と詠唱で吉水講は、浄土宗の法要儀式に二つの新しい歴史をつくりました。その一つ目は、昭和三十六年法然上人七百五十年大遠忌の時であります。一宗法要といつて全国



より参加された御住職によって、御門主猊下

を中心に庭儀式（お練り法要）が行われました。そのとき吉水講は初めて参加させて頂きました。浄土宗の歴史始まって以来初めてのことであります。松濤先生のお話にあった知恩院法務部長板倉貫瑞師のご理解とご指導により、お練り供養を盛り上げるために吉水講の参加を許して頂いたのです。立派な御住職の方の行列を乱してはいけませんから、事前の訓練が大変でありました。先頭に三百人、あとは後方に並びました。お唱えする種目に合わせた足の運び、立ち打ちの稽古、歩き方、特に直角に方向変換する足の運び方、三百名の講員の組分け、各組の指導者選定、全体の指導者、指揮の要領、連絡の取り方、昔の軍隊のような涙ぐましい訓練を重ねて、見事に庭儀式を盛り上げることができました。その後開宗八百年大法要、善導大師千三百年大遠忌、法然上人生誕八百五十年大法要、三上人大遠忌など、いずれも一宗大法要の庭儀式に

参加させて頂きました。

二つ目は悲しい涙のお別れの場合であります。三十二年の長い間吉水講総裁としてお導きを頂いた岸御門主猊下の御遷化の時であります。今までに前例がありませんから最初は断られました。が、板倉貫瑞師のご理解とご指導で表葬の儀式に吉水講百五十名の参加が許されました。猊下の葬儀式の差定は昔から決まっておりますが、特に五分間だけ時間を頂くことができました。

全国各宗派の管長様、大本山の御法主、浄土宗宗会議員、各教区教区長、教化団長はじめ役職の方々、一般の政界経済界の方々など約二千名の方で大殿は満員であります。吉水講はそのなかに参加させて頂きました。私は法務部長のご指示で、おつとめの始まる前、最初に「月影」の御詠歌（一分三十秒）、読経の中御回顧の直後に「光明摂取の御和讃」（二分）、そして最後に読経が終わってから「弥陀本願の御詠歌」（一分三十秒）を、涙と

緊張の中で奉納しました。本当に感激と感動でふるえました。葬儀式がすみ、お棺が女人坂を下りられる時、両側に並んで「光明撰取の御和讃」を涙とともにお唱えしたことを忘れることができません。このことが前例となり、高島猥下、藤井猥下の御遷化の時も、吉水講は詠唱とともに涙のお別れをさせて頂きました。詠唱ができる喜びを深く感ずることあります。

平成九年浄土宗総合学術大会が大正大学で開催された時、「念仏のシンボリズム」がありました。古代、中世の念仏信仰について大学の先生方のご講義があり、最後に真野龍海先生の「近代における念仏信仰の特色について」という講演がありました。先生は第一番に山崎弁栄上人の光明会、二番目に椎尾弁匡先生の共生会、三番目に知恩院のおてつき運動、そして四番目に吉水講の念仏信仰運動とお話になりました。私は聞かせて頂いていて全身が熱くなる程の感動を覚えました。私た

ちが詠唱の導きで吉水講を結成し、ひたすら祖師報恩行としての歩みを続けてきたことを、識者はこのように見ていて下さったということを知り、心から詠唱のお唱えに生きた人生を喜び、生き甲斐を感じました。

また昨年は今は亡き増上寺藤堂御法主台下から、「浄土宗の念仏教化の第一線に活躍される皆様ご苦労様です」というお言葉を二回も聞かせて頂きました。またまた感激でありました。今日迄吉水講のお手伝いをさせて頂いてきましたが、このような言葉を頂いたのは初めてでありました。私たちはもっと真剣になって、詠唱が念仏の助業であるということを意識するとともに、詠唱の指導発展、興隆のために努力せねばならぬと強く感じました。

全国のご住職方に「教化としての詠唱」を正しく理解して頂き、「念仏を唱えるための詠唱」としてご理解を頂き、一層のお力添えを頂きたいと思えます。

『法然の哀しみ』
を読んで

『人間法然』に 学ぶことの意義

山田康弘

檀徒

私には朝に夕にお念仏を称える母方の祖母の思い出がある。阿弥陀仏の像に向かって木魚を叩き大きな声でしっかりとその御名を呼ぶ高齡の祖母は、熱心な光明会の信者であったとあとで聞いた。子どもにとってやたら長く感じられたそのお念仏に陪席して形だけの合掌をしながら、ひたすらその終わるのを待っていた私は「仏様のお顔にほほえみが見えたら終り」と聞かされた。おばあ様の声にひかれて一緒に念仏を称えながら一心に仏様の御尊顔を見つめてそのほほえみの時を待ち続けた幼き日の思い出。「いちまいきしやうもん もろこしわがてうに……」と分けのわからぬ経文らしきものを誦んじるようになったのもその頃からであった。朝夕には必ず行われるこの「お勤め」はいつの日にも変わることなくこのようであった。

「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」と仰せられた法然上人が「少年時代に負った心の疵とは何か？」などという帯の

文字にひかれて手にした一冊の本。六十代半ばの私は五十年余りも前の祖母のお念仏の姿に重ねながらこの本を読んだ。三千枚を超える原稿を背景にして出来上がり千三百枚・七百頁に余るこの本は「一般の人が読めるように」とは言われてもとてもおいそれとは読みきれない分量であった。

少しずつ読み進めながら何よりも気になったのは、拝む対象になっていた法然上人というお方の「苦悩するお姿」であった。十五歳にして父母との別れ・父母殺害の悲報。出家者として学問の道に励む修道の日々。法然の名を高らしめた大原問答（法然五十四歳）に至るまでの四十年間。時代は平安の末から鎌倉へと大きく変動する時代。地震・台風・洪水・冷害・旱魃・大火などの天変地異、凶作・飢饉・疫病などの災難が人々を苦しめ続けていた。古代律令制が大きく揺らいで新興の武家勢力、源氏も平氏も一族が敵味方に分かれて骨肉の争いを繰り返す。保元・平治の

乱（法然二四・二七歳）に続いて治承の内乱（法然四八・五三歳）という戦乱の時代を法然は生きたのであった。

それは、無政府状態の社会的に不安定の中にうち続く天災人災の結果として「死」というものがいつでも日常生活の中にあるという実に悲惨な時代であった。到底、抽象的な宗教思想などに考えをめぐらしている余裕もなく差し迫った危機感・絶望感が世の中を覆っていたことであろう。このような時代に生きて法然はひたすら人間救済への道を求めて苦渋に満ちた修道と思索の日々を送りながら、人間としての深さと宗教家としての誠実さとを磨き上げていったのであると考えさせられた。

従来、宗門の方々を中心にして、宗祖法然は生者として崇拜対象化され、上から救済の手を差し伸べる救済者・聖者として描かれてきた。「聖者法然」が強調される結果として「人間法然」の息吹き・実像はかすんでいたように思う。人間として生身に受けた悩みや

哀しみの中から真の救いを求めた法然の生きざまが、そのままには見えにくくなっていたのではなからうか。

この「法然の哀しみ」には、著者梅原猛氏の学問的情熱に満ちた法然論が展開され、庶民とともに苦悩する人間法然の姿・鎌倉新仏教の先頭に立つ宗教改革者として日本で最も偉大な「宗教者法然」がその人間としての哀しみとともに描き上げられている。

著者によれば、法然の思想の中心は凡夫往生・悪人往生・女人往生にあるという。「法然は悪人往生というときに何よりもまず父のことを考え、女人往生というときに何よりもまず母のことを考えたのではなからうか」とする推論の確かさ、「法然の浄土教というものは、決してインドにも中国にもないものである。偏依善導というけれど法然の思想は決して善導の思想と同じではない」とする判断、さらには「法然は口称念仏にのみ強く執着して他の一切の行を認めず、それを惜しげもな

く切り捨てて、それが釈迦の教えであり善導の説であると信じた。法然の説そのものは仏教の根本精神に照らして正しいと言わねばならない。なぜならそこが阿弥陀の平等の慈悲になかったものだからである。それは仏教の根本精神である平等の慈悲への法然の確信でもあった」と徹底した平等主義の主張が説かれている。

二十世紀は科学技術の発展と戦争の世紀であったといわれる。情報化時代という未曾有

の世界に生きて、人間は機械の生み出した情報の洪水の中でただ途方に暮れている。文学的想像力と論理的構成力とを喪失して人間としての価値観が不確かなものになり、ひたすら大量の情報による虚構の上にさらに虚構を重ねる社会が肥大化してゆく、人間が人間らしく生きることの困難な時代は確実に到来している。この時代に「人間法然」の生き方に学ぶことの意義は大きいと感じた。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替001801245231

我が母慈悲して我れ等を生育し、
種種世間の事務を教示したまへり。
我れ等豈に母恩に報いざるを得ん。

〔大般若波羅蜜多經〕卷三〇六 仏母品

母は慈悲を以て私たちを生み育て、この世で生きるには何をなすべきか教えてくださいました。ですから、どうして私たちが母の恩に報いないことなどありませんか。

母の恩を知らざれば

例年に比べ、流行のピークが遅かった今年のインフルエンザ、頼りにしている妻が寝込んでしまった。ご飯の支度ぐらいはと奮闘したが、困ったのは、夜、まだ一歳の末娘っ子に泣かれたこと。寝付きが悪く、抱っこをしようが、おんぶをしようが、寝ぼけたまま泣きやまず、この私から逃れようするのだ。

でも娘にしてみれば、そりゃ、そうなのだ。彼女は毎晩、母親の乳房に吸い付きながら満腹になり、満足して、安心して眠りにつく。その感触が恋しくて泣いているのだ。男親、女親、子育てにはそれぞれ役割があるだろうけれども、男親から母乳は出ない。いくら泣かれても、こればかりはどうにもならないのである。

赤ん坊が、毎日、機嫌よく眠りにつく。しかし、それは母親が乳を含ませ添い寝をし、根気よくあやしたからのこと。妻はそれを至極当然のように毎日繰り返す。かつて自分もそう育てられてきたはず。そう思うと、改めて女親の「尊さ」に気付かされるのだ。

二〇〇〇年のシドニー・オリンピック。ご記憶であろうか、柔道

一〇〇キロ超級で優勝した井上康生選手は、亡き母の遺影とともに表彰台上がり金メダルを首にかけ、その遺影を高くかざした。じつはその前年、母は我が子が世界一になることを夢見ながら、にわかに病死した。彼は黒帯に母の名を刺繍して試合に臨み、すべてに一本勝ちをおさめた。父は自分が息子の柔道を指導し強くしたと自負していたが、その帯の刺繍を見た時から、母親の存在そのものが息子を強くしたと思うようになったという。母に誓い、母に捧げた金メダル。そう思うのは私だけではないだろう。

『大般若波羅蜜多經』は「般若波羅蜜は諸仏を生み出す、諸仏の母である」と母の尊さを般若（真理を見極める智恵）にまで譬え、さらには「仏とは生み育てていただいた母（般若）への恩を知り、それに報いる者」と説く。仏道を歩む者は母親への「知恩」「報恩」の念があつてしかるべきで、それが湧き起こらないようであれば般若の智恵など到底そなわらない、との教えが込められていよう。仏教の根幹には母への思いが流れているのだ。

諸仏にとつての報恩は母たる般若の智恵を巡らして、絶え間なく
 覺りの境地を切り開いていくことにあるという。他方、私たちにで
 きる報恩は孝養を尽くし、母親の願いに応えることだろう。もちろ
 ん、母親それぞれに子に託す願いがあろう。それは金メダルかもし
 れない。しかし親なら誰も願うのは、我が子が充実した幸せな人生
 を送ること。そしてつきつめれば、我が子の人生の終着が悪しき迷
 い世界ではなく、清らかな仏の世界であつて欲しいと願うのではな
 いだろうか。

阿弥陀さまは、お念仏を称える者の極楽往生を叶えてくださる。
 母の願いに報いたいのであれば、お念仏を称え極楽浄土へ往生を願
 えばよいのである。母に対する報恩の念が、翻つてじつは我が身に
 仏の慈悲を引き寄せているのだ。

六月、父の日がめぐつてくる。しかし、その「父」も、そして誰
 もが母から生まれてきた。何度でも胸に刻んでおきたいことであ
 る。

（浄土宗総合研究所研究員 袖山榮輝）

連載

『くすり箱』

水虫とくすり

薬剤師

市川真人

水虫は、白せん菌というカビの一種によってできるものです。足の指の部分に多く、梅雨どきから夏にかけて出てきます。このところ、とくに多くなつたといわれるのは、ナイロン製の靴下をはくようになったからだといわれています。カビですから温度と湿度の高いところが大好きです。

白せん菌のつく所は、表皮の最上部の角質層で、特に足が多く、なかでも小指と薬指との間と土ふまずからで始めます。ここが一番ムレやすいからのようです。

水虫の治療は外用薬が中心で、液剤、軟膏、パウダー等があり、症状によって使い分ける

ことがポイントです。液剤はカサカサした足の側面などにできる乾燥性のところに用います。筆・ガーゼ・脱脂綿等にふくませ、根気よく塗って下さい。ボタンと落すもの、噴霧式のものもあります。指の間にできたものは湿っていて、白くふやけたような状態になります。このようなときは軟膏を塗ります。パウダーは予防と治療の両方に使うことができます。カサカサしていてもジクジクしていても使え、つけたところを乾かす作用があります。靴をはく前に、患部に振りかけて下さい。また、靴の中にも白せん菌が住んでいるので、靴の中にも振り込んで下さい。

擦り込んでも白せん菌が住みつかない体質の人もいます。そのような体質になるための漢方薬もあります（漢方薬は人によって違いますので、漢方専門の医師、薬剤師に相談をして下さい）。

たかが水虫のくすりと思うでしょうが、その効果を最大にするために、次の点に注意して下さい。

塗る前には必ず患部を清潔にして下さい。殺菌消毒液もいいと思います。特にジクジクした水虫は不潔になりがちです。また、お風呂上りは皮膚が柔らかく、薬が浸み込みやすくなり、効果が上がります。水分をよく拭いてから塗って下さい。かゆみがなくなり、いかなo思ってから2ヶ月位は頑張つて塗って下さい。

白せん菌は汚れと湿気が大好きです。予防の一番は患部の清潔です。靴下は毎日とりかえ、洗濯したら太陽にあてて乾かして下さい。熱湯消毒も効果があります。靴下はナイ

ロン製よりも木綿製のものを薦めます。患部を乾燥させるには素足が一番です。できるだけ素足でいる時間をつくって下さい。汗をかいたら患部をなるべく早く、また、よく洗い、水気をよく拭きとって下さい。患部を涼しく保つことも大切で、できるだけ足を靴から解放してあげて、ムレないようにして下さい。

今は昔と違い、冬でも室内は暖く、また、湿気も適度にあり、靴の生活の人が多く、白せん菌が住み、繁殖するには条件が整つていて、一年を通して水虫を飼っている患者さんが多数おられます。

水虫とよく似た皮膚病もたくさんあり、他の皮膚病との見分けは大切です。水虫でない皮膚病に、水虫の薬を塗ると悪化することもあります。足がカユイからといって水虫とはかぎりません。

足がカユくなったら、早めに医師、薬剤師に、ご相談下さい。



法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

叡山入室の図

法然上人が比叡山に登り、師匠のもとに入室している場面である。法然上人の毅然としたお顔からも、これからの厳しい修行に対する心構えを窺うことができる。

残欠二巻本の上巻最後の詞書をみると、「得業叡山に送る状には、大聖文殊像一体送り奉ると、書きたりければ、かの像を尋ねるに、小童なり、奇異の思ひに住しぬ」とある。親覚得業は幼少の法然上人を比叡山の師匠に紹介するのに、その聡明さを讃えて、智恵の大聖文殊菩薩に例えている。親覚得業が幼少の法然上人にいかに関心していたかが窺える有名なエピソードである。

この入室の図で、対面している比叡山での法然上人の最初の師匠名は不明である。最初の師匠名については各種の法然上人伝記によって、慈眼房叡空説、持法房源光説、皇円阿闍梨説がある。残欠二巻本には「叡山に送るの状」とあるだけで師匠名を記していない。ただ下巻の詞書をみると、法然上人は久安三年（一一四七）仲冬、延暦寺で出家後、功德院の皇円阿闍梨について天台六十巻を学び、更に久安六年に黒谷の叡空上人の禅室を尋ねたと記されている。消去法が許されるならば、ここに描かれている師匠は源光上人ということになるうか。

(宇高良哲・大正大学教授)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〈特選〉

●光

傘越しにかけられし声風光る

山口 信子

近ごろは紫外線の害がよく言われる。だからもう日傘をさしているのである。その傘の間から声をかけられて、はじめて知人だと気がついた。明るい光が、相手の顔を見落とさせたのである。

〈佳作〉

雨粒の光こぼさず花菖蒲

中島富士子

卒業の子等海光の浜駆ける

石原 新

花過ぎの光けたるき屋根の照り

島谷ときを

●土

〈特選〉

春の土太りじしなる農婦の絵

松本 章彦

太った肉体がよくわかるのだから、暑さを感じられる日だろう。といって田畑で働いているのではない。ここは読者の自由に任され

選者=増田河郎子

〈特選〉

田の泥に隠れしつもり蝌蚪の影

小久保あきを

●自由題

ている。絵を材料にするのは楽なので手抜きになりやすいから、多用は慎みたい。

〈佳作〉

到来の筒土のしめりある

中島 一子

苗代の土はねている耕運機

長尾 子浪

春風や土にまみれし子の手足

谷 しげ子

〈佳作〉

朝風や紫陽花の芽のたくましさ

上野 明達

場所取りの花見シートを濡らす雨

杉山 省吾

峠越え隣の村へ梅を見に

増田 信子

時青自由題

① 季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品 編集部選

光

雨雲の一片光り花こぶし
木曽路来て出逢ひの春の光かな
遠き地の曾孫一号風光る
父と子の肌光り合ふ葛蒲の湯
おだまきの花うつむきて光有り
光といふ煙草のありぬ彼岸まで
光る海のどもとに刃のごときひと
夏近し郵便切手光りをり
光線のプリズム乱す濃紫陽花
春野より光と呼べばきみの犬
羊羹の手強き光春座敷
逝く春や光るものから巻かれゆく
春の日に杉山の幹白光す

河合富美枝
長尾子浪
山本美代子
大場清
山本のり子
森中由香里
神田弓絵
島神涼子
柴崎亮一
矢野玉枝
飛鳥和洋
神保幸代
増田信子

締切・六月二十日

発表・『浄土』九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

土

春の土踏んで一路の日和かな
夏めくや声のあふるる土手の上
土のせて小さき土筆が世を覗く
退院の日来て土筆の生え出づる
田起こしの土春り来る大地かな
山菜やこごめたらのめ土の宿
下萌えの土に遊びし省かな
老婆また土を盛り揚ぐ葱ぼうず
すべり台泥んこになり山笑つ
土筆摘み川向うにも二三人
丹念に土の匂いの燕の巣
春風や土にまみれし子の手足

河合富美枝
中島富士子
山本美代子
大場清
山本のり子
千崎千春
谷しげ子
井村善也
山口信子
増田信子
石原新
谷しげ子

自由題

満月の砂々と踏み春惜しむ
かげろふにゆらり石仏立ち給ふ
桜狩り車椅子押す療法士
桜観て心素直に戻りけり
梅雨空や祝いの裾短くし
悲しみのなきそよ風よ桜舞ふ
玄関に猫の足跡春の風
腕時計はずしてどつと花疲れ
4、5月号編集部選、山本美代子さんの句に誤植がありました。謹んでお詫び申し上げ、訂正させていただきます。正しくは「蓬摘むことなつかしくてたのしくて」散り椿五弁ハラリとあざやかにです。

河合富美枝
中島富士子
中島一子
山本美代子
山本のり子
長尾子浪
大村和代
北村弘子

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

四苦八苦

この「しくはつく」、みなさんもよく口にされる言葉でしょう。右を見ても、左を見ても、苦勞ばかりという意味ですが、四苦は「生・老・病・死」。

八苦はこれに「愛別離苦」、「怨憎会苦」、「求不得苦」、「五陰盛苦」が加わります。

愛する者と別れる苦しみ、会いたくない者に会う苦しみ、欲しい物が得られない苦しみ、人であることゆえの苦しみ、です。

文字面から仏教語とすぐわかる四苦八苦ですが、どうやら、この意味を知るのにも四苦八苦しそうです。



※食物アレルギーと 好き嫌いは ちがいます。 気をつけましょう。

編集後記

蝸牛ならまぶしき光は避けていむ 俗潤

「明日があるさ」という歌が、歌詞がリメイクされて大ヒットしている。元の歌は青島幸男の歌詞で、うぶで控えめな男子高校生のあわい恋心を歌ったものであったが、今はやっている歌はサラリーマンのはかない悲哀を歌ったものになっている。元の歌なら、最後の「明日がある」が希望的に聞こえてくるものが、今の歌ではちっとも現実的に聞こえてこない、せんだみつおじゃないが、「明日がない」といったくなるのもわかる気がする。

そんな絶望的な世の中で、今小泉新内閣の支持率が八〇%を越えている。

野党議員の厳しい質問に対して、「そんな質問をするな」というファックスが殺到する。これもまた異常事態だといわざるえない。期待と現実直視があれば意見がぶつかるのは、また当然であることを理解する必要がある。

世の中を厭世的に見ることも、また楽観的に見ることも、実はおかしいことで、自然に、自由に、冷静に見てゆく目をいつでも保っていたい。そうしたとらわれない目をもつことが、仏教的なことだと私は思っているが、違うのであろうか、先輩諸氏の意見を拝聴したい。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川俗潤
斎藤晃道
村田洋一
佐山哲郎

編集顧問

大室丁皓

浄土

六十七巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十二年五月二十日

発行

平成十二年六月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行者

法然上人鑽仰会

電話

〇三(二五七八)六九四七

FAX

〇三(二五七八)七〇二六

振替

〇〇一八〇八八二八七

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



民家近し 静かに



足元注意



前出口



踏切あり



敲 撞

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわるな



われ物注意



安全第一



歩道注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人鑽仰会まで。

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠



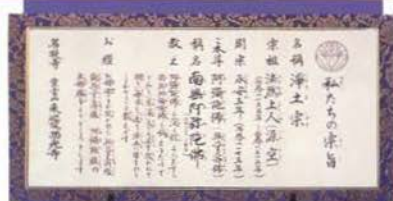
水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
- 水晶数珠
ブレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配達などについては送料当方負担でお取り替えいたします。



水晶数珠ブレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

- 大(320×183ミリ)
1,260円(送料別)
- 小(273×142ミリ)
480円(送料別)

選択集十六章之図
選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

